
愛、ヲ、クダサイ

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛、ヲ、クダサイ

【Zコード】

Z5917E

【作者名】

久芳

【あらすじ】

今から、一月ほど前。あたしのピエロのぬいぐるみが、突然動き出すようになった。愛してください。愛をください。どんなに逃げても、ピエロは追つてくる。あたしはピエロから、逃げることができない。

愛、を、ください。
愛、を、ください。
あなた、の、ため、なら。
なんでも、する、から。
愛、を、ください。
愛、を、ください。

「な、んで……」

あたしは、それ、を見た瞬間、思わず立ち止まってしまった。
後ろを歩いていた男子生徒が、あたしにぶつかり、怪訝そうな顔
でこちらを振り返っていく。
けれどあたしは、一步も動くことができず、ただ、田の前の道路
を見つめていた。

愛、を、ください。

校門を出すぐの、下校中の生徒がたくさん歩く通学路。車がひ
つきりなしに行き来する道路に、それ、はいた。
手のひらに乗るサイズの、キーホルダーにしては大きい、頭にヒ
モがついたぬいぐるみ。フェルトでできたまるい顔に、白い毛糸の
髪。黄色い星と赤い涙を描かれた顔に、紫色の服ととんがり帽子。
愛らしいピエロが、頭上を車が通り過ぎていくのも気にせず、は
いつくばりながらこちらを見ていた。

愛をください。愛してください。ただペイントされただけの口な
の、こんな距離では聞こえるわけないのに、ピエロがそう、あた
しに言ってくる。愛してください。愛してください。なんでもする

から、愛してください。

「やめて……どうして……」

動けるわけ、ないのに。

いつもあたしを追い回すから、捨てたのに、戻ってきて。何回捨ても、戻ってきて。だから、ダンボールにガムテープを巻いて、ベッドの下にしまいこんだはずなのに。

ピエロは一頭身の身体を重そうに引きずりて、あたしだけを見て向かってくる。中身はただの綿だから歩くことはできなくて、身体を泥だらけにして向かってくる。

可愛くて買つて、ずっとスクールバッグにつけていたものだけど、今はもう恐怖しか感じない。

愛してください。愛してください。

泥だらけの頬をアスファルトに擦り付けて、ピエロがあたしを見る。田が合つと、口元がピクリとひきつる。どうやら、嬉しくてさらに笑つたらしい。

「……筒井さん？」

ふいに、背後から声をかけられた。

硬直するあたしに声をかけたその人は、凍りついたあたしの表情と道路のピエロを見ると、そう、と一人呟いた。

そして車が来ているにもかまわず道路におり、ピエロを拾い、また戻ってきた。

あごのラインにそろえて切つた髪を風にそよがせて、彼女はすり落ちたスクールバッグをかけなおしながらピエロを差し出してくる。

「青野さん……」

「これ、筒井さんなのでしょう?」

青野さんが、黒目がちな瞳で、じちりを見てくる。その瞳が、ピエロを受け取れといつている。

「そうだけど……」

受け取らないでいると、彼女は無理やりあたしに握らせた。

青野さんの手の中では黙り込んでいたピエロが、また、愛していく

ださいと動き出す。あたしは取り落としあうなるけど、彼女の瞳
がそれを許さなかつた。

愛していくだわい。何でもするから。言しながら、じたばたと手の
中でもがくピヒロ。それを静かに見つめ、彼女はあたしに言つた。

「その子を、愛してあげてね」

そしてそのまま、去つていつた。

「青野さん……」

あたしは引き止めることができなくて、ただ呆然と、その背中を
見つめていた。

ピエロが動き出したのは、一ヶ月ぐらいい前のこと。夏休みがあけて、課題テストが終わつたころだつたと思つ。

いつも持ち歩いているピエロが、突然、動き出した。

愛してください。愛してください。昼も夜も、あたしだけにしか聞こえない声でそれは訴えてくる。たまらず捨てても、いつの間にかバッグに戻つてゐる。勝手にバッグから離れては、夜に枕元にあらわれる。

みんな、スクールバッグにキャラクターもののぬいぐるみやリボンなど目立つものをつける中、あたしはピエロだった。店でみつけて一目ぼれして買ったものだから、突然こんな風になつてショックを受けた。

何かにとりつかれているとしか思えない。

家に帰つて、ピエロをバッグと一緒にベッドの上に放り投げて、あたしはケータイのアドレス帳を開いた。

登録名は、『尋ちゃん』。一度も呼んだことのない、青野さんの名前だ。

青野さんは、このピエロのことがわかるんだ。あたしは、教えてもらつてから一度もかけたことのない番号を呼び出した。

愛をください。愛をください。ピエロが、バッグの下敷きになつて苦しそうにもがいている。愛をください、なんでもするから。

青野さんに訊こう。

あたしが通話ボタンを押すとしたとき、ケータイが鳴つた。

驚いて、思わずケータイを放り投げてしまつ。最近ピエロのことで神経をすり減らしているから、ほんの些細なことでも、心臓が早

鐘を打つようになつてしまつていた。

それでもあたしは名前を見て、すぐに出た。

「もしもし、浩一？」

『真悠、声震えてない？ なんかあつた？』

「うん、なんでもない、とあたしは咳払いをする。ケータイを拾つたときのまま、絨毯に座り、ピエロを視界から消した。

「最近電話ばっかりしてくるね、珍しい」

『なんだよ、メールのほうがいいのか？』

「そういうわけじゃないけど」

中学のときから付き合いはじめて、スポーツ推薦で地元から離れた高校に行つた浩一とは、三年の遠距離恋愛が続いている。もうすぐ大会だというのに、彼は最近よく電話をしてきた。

『ただ声が聞きたくなつただけ』

「お盆に会つたばかりじゃない」

幸い、ピエロは電話がかかつってきたとたんぴたりと動かなくなつた。ピエロが動いたりしゃべつたりするのは他の人にはわからないようだけど、青野さんにはわかつていて。電話のむこうで愛をくださいと騒がれたら、浩一も驚くだらう。

彼はあたしの心配なんて知らずに、あっちの学校のことや部活のこと話をしている。その中には夏休みのときに聞いたものもあって、正直今は一刻も早く青野さんに相談したかった。

『……なんか、機嫌悪い？』

「えつ、全然」

苛立ちが伝わったのだろうか、あたしはあわてて声をつくる。

「生理中なだけ。気にしないで」

『そつか』

そつかの声に、安堵が含まれているのをあたしは聞き逃さなかつた。

お盆休みで帰つてきたとき、Hッチの最中に起きたこと。浩一はそれを気についていたのだろう。

『そつか……』

本人は悟られまいとしているようだけど、バレバレだ。それ以降、話す声がやたら明るい。四六時中、ゴムが破れたことばかり気にしていたのだろう。

「……じゃあ、切るね？」

『おう、機嫌悪いとこごめんな』

大会頑張つてね。そう、どうも身の入りきらない応援をして、あたしは通話を切る。そしてすぐに、青野さんにかけた。会話を終えた瞬間、ピエロが激しく暴れだした。恐くて、あたしは電話がつながるまで、身体を折つてうずくまつっていた。

愛、を、ください。

愛して、くだ、さい。

青野さんは、同じクラスではない。

隣のクラスで、名前と顔は知っていたけど、お互に知っていたのは存在だけだった。

きっかけは、去年の冬休みの課題テスト明け。あたしは生理不順と生理痛の相談をしに、テストが終わって午後休みだったのを利用して、産婦人科にきていた。

評判がいいと聞いて行ってみたけど、それでもなかつた。いつも女医さんが運悪くその日はいなくて、かわりにベテランの男性の医師だつたけど、手練すぎて流れ作業のような診察をされて、正直不満だつた。

基礎体温をつけて様子を見よつ、と言われて、基礎体温表と痛み止めの薬を出された。診察室から出たら、あたしと同じブレザーを着た人を見つけたのだ。

『青野さん、だよね？』

あたしの呼びかけに応じた彼女は、同姓からも可愛いと評判だつた。ゆるパーマをかけた長い髪に、ピンクのニットがよく似合つて、テスト期間だから化粧はほとんどしていないけどまつ毛も長くて。短い丈のスカートからのぞく脚はとても細かつた。持ち歩く小物も可愛い系で、濃紺のスクールバッグには、あたしのピエロと同じシリーズのくまのぬいぐるみがついていた。

彼女はあたしに気づくと、わきにおいていたバッグを抱えて、席をあけてくれた。待合室は混んでいるし、別に他に座る理由もなかつたので、あたしはありがとうと隣に座つた。

胸にかかる髪を指に巻きながら、青野さんは『生理不順?』と訊いてきた。明るい声に、丸くて大きな瞳。あたしは素直にそうだと

うなずいた。

『なんか周期がばらばらで、生理じゃないときもお腹痛くなったりするからさ、念のためにって。青野さんも?』

『私は、違うの』

首を振つて、彼女はくまをなでる。そのしぐさが可愛くて、あたしは同姓ながら思わず頬が緩んだ。

『妊娠したの』

あつけらかんと、彼女は言った。

『だから、今度、墮ろすんだ』

あたしはぽかんと口を開けていた。それを見て、青野さんはくすりと笑つた。

『まさかまさかとは思つてたけど、いい加減やばいかなと思つて調べたら本当にあたつてね。だから、病院にきて、いろいろ相談したんだけど……』

あたしの口からかるうじて出た言葉は、一人で来たの? だつた。あちこちであたしたちのように話をしている人たちがいるから、待合室は案外この話が響かなくて、制服を着たあたしたちをしげしげと見る人もそれほどいなかつた。

『親と来たの。今、トイレ行つてるんだけど……泣いてるんじゃないかな。あたしが妊娠したつて聞いて、そうとうショック受けてるもん』

彼女の声は、つとめて明るかつた。妊娠して墮ろすなんて話なのに、全然気にも留めていないようだ。こんなに簡単にあたしに話すなんて、正直どうだろうと思つてしまつ。

『赤ちゃんつてさ、三ヶ月だとけつこう大きいんだ。ケータイと同じぐらい。それを子宮に器具入れてバラバラにするんだって。もう、指とかもちゃんとできるのに』

思わず、口元が引きつった。この子、何でこんなことを平然と言ふんだろ? できたら墮ろせばいいなんて簡単に思つてるのかな。

『ケータイぐらいの子供が、今、私のお腹にいるんだって。なんか、

あまり実感がないんだよね』

触つてみてよ、と、青野さんがわたしの手をとる。抵抗する間もなく、制服ごしに彼女のお腹に触れた。

『お腹もまだ、ぺったんこなのに……』

青野さんの声が、かすかに震えた。わたしの手をとる指先も、小刻みに震えていた。折り目の綺麗なプリーツごしに、彼女の体温を感じる。しつとつと、つかむ手が汗ばんでいた。

『……ね

なにが、ね、なのだろう。わたしは自分でもよくわからない相づちをうつ。青野さんは、またくすりと笑つて、かすかに鼻をすすぐた。

『彼氏は、このこと知ってるの?』

『知ってるよ』

『それで、堕ろすことになつたの?』

『うん』

そう、としか言えない。わたしは青野さんが流す涙に、ただハンカチを差し出すしかなかつた。

一瞬でも、妊娠を軽く考へてゐるなんて思つてごめんね。そう、心中であやまる。軽くなんて考へるわけない。考へていたら、青野さんは涙なんて流さない。

あたしたちは互いに無言になり、お腹にあてた手もそのままだつた。かける言葉も見つからず、青野さんもひつそりと泣いていて、沈黙が重かつた。

あたしは診察を待つてゐる間に、先に入つた子のことを思い出した。違う高校の制服で、お母さんと一緒に來ていた。あの先生は気配りもせず大きな声でしゃべるものだから、彼女が処女だということも漏れた声でわかつてしまつた。

生理中じゃなくてもお腹が痛くて。あたしと似たような症状だ。じやあ卵巣に水がたまつてないか調べるからと医師が言つ。そして母親に、今はエコーで調べられるので、セックスの経験がなくても

大丈夫ですよ、中に器具入れたりしませんから。と説明していた。
あたしも青野さんも、そんな説明を受けることはなかつたし、それは「これからもずっと言われないことだつた。

青野さんは電話に出なかつた。

ピエロはあいかわらず、もがいている。ひび割れたような声で、あるいは悲鳴のような甲高い声で、あたしに向かつて言い続ける。愛をください。愛してください。何でもするから愛してください。必死にバッグの下から出ようとしているのだろう、小さな腕が布団を叩く音が聞こえる。

「青野さん……」

あきらめられなくて、あたしはかけなおす。なにかをしていいないと不安だつた。ピエロが恐いのなら、逃げればいい。いつそ、焼いてしまえばいいのかもしれない。でも、なにをしても、ピエロはずっとあたしを追うような気がして、解決するしかないと思つのだ。

「青野さん、お願ひ……」

つながらない電話に、あたしは祈る。普段ろくに口をきかない相手なのに、こんなにもすがつている。でもあたしには他に、頼れる人がいなかつた。

「お願ひ……」

病院での一件以来、彼女は変わつた。

すこしずつだけど、雰囲気が違うものになつていった。着ているセーターの色も、紺やグレーといった落ち着いた色になつた。短いスカートはあいかわらずだけど、持ち歩いていた小物もシンプルなものに変わつていった。

綺麗に弧を描いていたまつ毛も、ピンクのアイシャドウも、グレーの落ち着いた色になつて、化粧の仕方も変わつた。誰かとつるむこともなくなり、一人で歩いているのをよく目にした。

その変化は早急なものではなく、徐々に徐々に、一日一箇所、す

ぐには気づかないようなところがかわっていった。すぐそれに気づいたあたしは、やはり青野さんの出来事を知っていたからだと思う。そしてあの豊かな髪をぱっさり切ったときから、彼女の態度は一変した。いつも静かな瞳で、静かな口調で。あまり目立つこともなくなつた。

それでも不思議と、彼女が中絶したという話を耳にすることはなかつた。学校の生徒が妊娠したという噂が流れるのは珍しいことじやないし、実際あたしも何度も聞いていた。彼女の彼氏が大学生だというのもあつたからだろうか。変わつた変わつたと注目されはしたけど、失恋したのかな、と囁かれた程度で、中絶したという話はまったくもつてなかつた。

彼女は今も変化の真っ最中で、シールをべたべた貼つていった教科書もまつさらになつていて。除光液で落としたのか、それとも買い換えたのか。毎日会うクラスメイトより、時たま会う程度のあたしのほうが、その変化をひしひしと感じた。今の彼女の昔の名残といえば、やはりバッグにつけたくまのぬいぐるみぐらいだろうか。

何度も何度も、留守番サービスにつながつてしまふ。それでもあたしはかけなおす。

病院で涙した彼女と、ピエロを差し出してきた彼女。それは間違いないく同一人物なのに、別人のようだつた。静かな瞳には、大切なものを失つた、悲しみに満ちた黒い影が宿つていた。

「青野さん……」

出ない。どんなにかけてみても、出ない。

あたしは一人、うなだれるしかなかつた。

あいかわらずピエロは元気だ。困つてしまつぐらい元気だ。愛をください愛をください。お願いです、愛をください。

耳をふさいでいると、メールが一通。名前は浩二。タイトルは『ごめん』。

『さつき、変な電話してごめん。俺、真悠が妊娠したらどうしようつて心配だつたんだ。真悠のこと、傷つけたくなかつたんだ』

返事をする気にはなれなかつた。しばらく眺めて、あたしは待ち受け画面に戻した。

浩一はこうして、避妊に失敗したことを気にしていた。きっと部活も上の空だつたんだと思う。もしあたしが妊娠してしまつたら。きっと傷つけてしまう。そう思つていたのだ。

傷つけると思つていうことはやつぱり、浩一も最終的には中絶をせらつもりだつたのだろう。

青野さんの彼氏はどうだつたのか。青野さん自身はどう思つたのか。彼女のお母さんは、両親は、何を思つたのか。

あたしは彼女が、あたしの前でしか、涙を流していないように思えた。彼氏や親の前では決して泣かず、一人でひつそりと、涙を流す姿を容易に想像できる。

真悠のこと、傷つけたくなかつたんだ。

浩一の言葉が、なぜだかあたしをいらだたせる。できたら墮ろすしかない。彼は密かに、そう決断していたのだ。

愛をください、愛をください。ピエロの声はかれることもなく、どんどん大きくなつていぐ。愛をください。愛をください。ひたすら愛を求めて、泥だらけであちこち擦り切れた身体で、愛をください。愛をください。

青野さんは、自分に宿った子供を、どう選ひたのか。あの涙は何を思つた涙なのか。

中絶。言葉にすればたつた一文字。でもとても重いその言葉を決断した彼女が流した涙。産もうと思つたのか、産めないと思つたのか。

あたしたちはもう十八で、結婚もできるし働くこともできるのだから、子供を育てることだつてできるだらう。でもあたしは専門学校を、青野さんは大学進学を希望していた。

これからのことを考えるのなら、やっぱり、産めないと思つかもしない。

でも、それでも。

思考がめぐる。考えてしまつ。彼女が何を思つたかなんて、本人でしかわからないのに、いつしてあれこれ考えてしまはんくて。でも、あたしは、彼女の涙を忘れることができない。

愛、を、ください。

背後で、ぼどり、と、鈍い音がした。

振り向くと、ピヒロがいた。バッグの下から這い出したのだから、身体が少しつぶれていた。

愛、を、ください。

あたしはもう逃げる」ともなく、ただそれを、呆然と見つめていた。

ピヒロが、すこしずつ、じゅうにむかってくる。ずる、ずる、と、身体を引きずる音が聞こえる。

愛して、ください。

ヒロセジウム、こんなに愛を求めるのか。あたしはあなたが恐いのに。恐くて、愛せやしないのに。

、そして、ごだんご。

一瞬、だけでも、いいから。

愛してくださり

לענין...

あたしは、ピロに手を伸ばした。
のせわざにこられなかつた。

この、醜い、身体を。
愛して、ください。

一瞬で、いいから。

הנְּצָרָן

泥のついた三角帽に、そつと触れる。それだけで、ピエロは前進を止めた。そしてあたしの指に、赤い涙がかされた頬を、すりよせてくる。

愛、を、ください。

頭を撫でると、嬉しそうに身体をゆりした。

あたしはそつと、ピエロを抱きかかる。ピエロが、お腹に顔をうずめてくる。あたしはただ、頭を撫で続けた。

愛をください。愛をください。愛をください。ペニロが、あたしに囁く。

ケータイが鳴り、相手を見る。

青野さんだった。

『ごめんなさい、塾だったの』

静かな声だった。でもその響きの中には、心配といつ感情もこもっていたのをあたしは感じ取った。

「あの、青野さん……」

これから、会える?

そう切り出したあたしの腕の中で、ペニロがまた、愛をくださいと呟いた。

「……」「めんね、呼び出しちゃつて」

「いいの、もう帰るだけだつたから」

待ち合わせは近所の公園にした。青野さんがわざわざ、あたしの家の近くまで来てくれたのだ。

私服に着替えたあたしに対し、青野さんは制服のまま。とりあえず座りうかとベンチに座った。

「ひつして隣に座るのは、病院以来だ。

「ピエロのぬいぐるみのことなんだけど……」

あたしは早々と切り出した。空はもへ、夕焼けとともに薄闇が広がりはじめていた。ためらつていたら口が落ちて、言えないまま終わってしまった。そいつだった。

「ちやんど、愛してあげた？」

青野さんは、そう言いながら、あたしの手の中にいるピエロの頬をつついた。しゃべりこなしないものの、ピエロもくすぐったそうに身をよじらせていて。ピエロが動いていたことに、あたしはもう、嫌悪を感じなかつた。

「愛してあげてね。私は、できなかつたから……」

そう呟く青野さんの横顔は、夕日に照らされて深く影をつくつている。伏せられたまづが、小刻みに震えていた。

「青野さんのところにも、来たんだよね」

「うん。でも、愛せなかつた」

気づくのが遅くて、去つていった。彼女は、そう呟く。消え入りそうな小さな声で、遅かったのと、自分自身に言い聞かせていて。だからあたしは、ピエロを手渡した。

「人形」と、あげるから。だから、愛してあげて？」

渡されて、青野さんは伏せていた田を見開く。何か言おうと口を開くから、あたしはそれをさえぎった。

「この子、青野さんの子供なんだよね？」

中絶して、もう身体はないけれど、魂だけは残っている。その魂が、このぬいぐるみに乗り移つたと考えれば、納得がいくし、もう、そうとしか思えない。

愛をくださいと、得られなかつた愛を求めて、母を求めて。

青野さんの子供が、このピエロに、乗り移つて。

お腹のこに満たされなかつた愛を求めて、あたしに訴えてきた。

「そうでしょう？」

「違つ」

あまりにもきつぱりとした否定に、あたしはひとつに何も言つことができなかつた。

「違うわ、違う。私の子じゃない」

「でも……」

食い下がるあたしに、彼女は首を振る。違つ、違うわ。そつ吐きながら、静かな瞳であたしを見た。

「あたしの子は、この子」

そう、彼女はバッグに手をやる。そこにじぶら下がつているくまのみいぐるみを指す。ピエロのように動かない、ただ重力に従つているだけのくまを、青野さんは大事そうに撫でた。

「このくまも、ピエロみたいに、動いたの。気持ち悪くてずっと無視してたけど、墮ろしたら、うんともすんとも言わなくなつたの、わかる？」と瞳で問われて、あたしは何も言えなくなる。嘘ではない。

こんなこと、嘘にしていいわけがない。

「墮ろされるのわかつたから、この子、頑張つて愛してもいいね」としてた。せめてお腹にいる間だけはつて、ずっとずっと、愛をくださいつて

口調も、ただ静かで。あたしはピエロを返されて、受け取るしかなかつた。

「私は気づくのが遅かった」

でもね、と、彼女は立ち上がる。太陽を背にして、逆光で黒くなつた姿であたしに言つた。

「でも、筒井さんはわかってるんでしょ？」

手を差し出されて、あたしは立ち上がる。そして背を押されて、歩き出した。

後ろで青野さんが、声をかけてくる。

「愛してあげて。どんな結果になつても、今は愛してあげて」
あたしは振り返らず、歩き出す。思わずかけだしそうになつて、ダメだと思つて歩調を戻す。ピエロを両手に握り締め、ただひたすら、歩く。

生理なんて来ていない。

あたしは浩一に嘘をついた。

これ以上彼に心配をかけてはいけないと思ったから。大会が近いのだから、部活に集中してもらいたかったから。

あたしは生理不順だから、体温の変化も、そのせいだと思つてごまかした。事実を知るのが恐くて、何とか自分に都合のいい言い訳をしていた。

でも、青野さんに言われたら、もう逃げることはできないうまを撫でる青野さんは、とても愛おしそうな表情をしていた。

あたしはピエロに、あんな顔してあげていなさい。

もう逃げられない。言い訳もできない。ピエロからも、青野さんからも。

そして自分からも、逃げられない。

あたしはただひたすら、歩く。薬局に行かなきゃ。お金はあったかな。

妊娠検査薬、買わなきゃ。

♪Hロガ、やれやべ。

織、や、くだなこ。

END

「……ごめんね、呼び出しちゃって」

「いいの、もう帰るだけだつたから」

待ち合わせは近所の公園にした。青野さんがわざわざ、あたしの家に近くまで来てくれたのだ。

私服に着替えたあたしに対し、青野さんは制服のまま、とりあえず座ろうかとベンチに座った。

いつもして隣に座るのは、病院以来だ。

「ピエロのぬいぐるみのことなんだけど……」

あたしは早々と切り出した。空はもう、夕焼けとともに薄闇が広がりはじめている。ためらっていたら口が落ちて、言えないまま終わってしまいそうだった。

「ちゃんと、愛してあげた？」

青野さんは、そう言いながら、あたしの手の中にあるピエロの頬をつづいた。しゃべりこそしないものの、ピエロもくすぐったそうに身をよじりせている。ピエロが動いてこると「う」と、あたしはもう、嫌悪を感じなかつた。

「愛してあげてね。私は、できなかつたから……」

もう喉く青野さんの横顔は、夕日に照らされて深く影をつくつている。伏せられたまつげが、小刻みに震えていた。

「青野さんのところにも、来たんだよね」

「うん。でも、愛せなかつた」

気づくのが遅くて、去つていった。彼女は、そう喉く。消え入りそうな小さな声で、遅かったのと、自分自身に言い聞かせている。だからあたしは、ピエロを手渡した。

「人形」と、あげるから。だから、愛してあげて？

渡されて、青野さんは伏せていた田を見開く。何か言おうと口を開くから、あたしはそれをさえぎった。

「この子、青野さんの子供なんだよね？」

中絶して、もう身体はないけれど、魂だけは残つてゐる。その魂が、このぬいぐるみに乗り移つたと考えれば、納得がいくし、もつ、そうとしか思えない。

愛をくださいと、得られなかつた愛を求めて、母を求めて。

青野さんの子供が、このピエロに、乗り移つて。

お腹のこりに満たされなかつた愛を求めて、あたしに訴えてきた。

「わうでしょ？」「ううでしょ？」

「違う

「違う

あまりにもきつぱりとした否定に、あたしはひとに何も話つことができなかつた。

「違うわ、違う。私の子じゃない」

「でも……」

食い下がるあたしに、彼女は首を振る。違う、違うわ。やうやきながら、静かな瞳であたしを見た。

「あたしの子は、この子」

そう、彼女はバッグに手をやる。そこにぶら下がつているくまのみにぐるみを指す。ピエロのよつには動かない、ただ重力に従つているだけのくまを、青野さんは大事そうに撫でた。

「このくまも、ピエロみたいに、動いたの。気持ち悪くてずっと無視してたけど、墮ろしたら、うんともすんとも言わなくなつたの」わかる？と瞳で問われて、あたしは何も言えなくなる。

嘘ではない。

こんなこと、嘘にしていいわけがない。

「墮ろされるのわかつてたから、この子、頑張つて愛してもうおうとした。せめてお腹にいる間だけはつて、ずっとずっと、愛をくださいって」

口調も、ただ静かで。あたしはピエロを返されて、受け取るしか

なかつた。

「私は気づくのが遅かつた」

でもね、と、彼女は立ち上がる。太陽を背にして、逆光で黒くなつた姿であたしに言った。

「でも、筒井さんはわかってるんでしょ？」

手を差し出されて、あたしは立ち上がる。そして背を押されて、歩き出した。

後ろで青野さんが、声をかけてくる。

「愛してあげて。どんな結果になつても、今は愛してあげて」

あたしは振り返らず、歩き出す。思わずかけだしそうになつて、ダメだと思つて歩調を戻す。ピエロを両手に握り締め、ただひたすら、歩く。

生理なんて来ていない。

あたしは浩一に嘘をついた。

これ以上彼に心配をかけてはいけないと思つたから。大会が近いのだから、部活に集中してもらいたかったから。

あたしは生理不順だから、体温の変化も、そのせいだと思つてごまかした。事実を知るのが恐くて、何とか自分に都合のいい言い訳をしていた。

でも、青野さんに言われたら、もう逃げることはできない。

くまを撫でる青野さんは、とても愛おしそうな表情をしていた。

あたしはピエロに、あんな顔してあげていない。

もう逃げられない。言い訳もできない。ピエロからも、青野さんからも。

そして自分からも、逃げられない。

あたしはただひたすら、歩く。薬局に行かなきゃ。お金はあつたかな。

妊娠検査薬、買わなきゃ。

ピエロが、やさやく。

愛、を、ください。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5917e/>

愛、ヲ、クダサイ

2010年10月8日15時38分発行